

経営一転語 27 外注はどう考えればよいのか。

外注政策は、非常に重要です。ありがちな考え方としては、「外注を少なくして、内製（内作）に切り替え、収益性を高める」という考え方です。

実際、外注していたものを内製化すると、経常利益額も増え、売上高対経常利益率（売上高に対する経常利益の率）も上昇することが多いのは事実です。

しかし、これはものごとの一面しか見ておらず、もう少し慎重に検討した方がよいのです。

外注していたものを内製化すると、固定費である「人件費」の増、設備購入による「減価償却費」の増、設備購入による「キャッシュの流出」、設備購入に伴い借入をしておれば、借入金の返済による「キャッシュの流出」、利息支払いという「固定費」の増、設備導入に伴いスペース確保、電気代等の「固定費」の増など、色々な「固定費」を増やし、「キャッシュを流出させる」というマイナス側面が結構あるのです。

一方、外注比率を高めると、多くの場合、経常利益額の減少、売上高対経常利益率の減少、外注費（変動費）の増加となりますが、増える費用といえば、外注費が主なものです。

これは、設備投資による固定費の増加とは違って、売上が増加すれば「外注費が増え」、売上が減少すれば「外注費が減る」というように外部要因の変化に柔軟に対応できる弾力性が大きくなります。

その上、売上増大となっても、損益分岐点の上昇がわずかなので、売上が下がってくる不況期にも、少ない売上でも利益が出る体質となっており、企業の安定度が増大するのです。

内製しているものを外注したらどうなるか？外注しているものを内製したらどうなるか？と試算してみることが大事です。ぜひ、試算してみてくださいと思います。

<演習課題>

1. 内製しているものを外注にしたらどうなるか、外注しているものを内製したらどうなるか、試算してみましよう。